ヴェルダ・マーヨ通信

ヴェルダ・マーヨ（緑の5月）は長谷川テルのエスペラント名

NO.61

2025.5.7

奈良・長谷川テル
顕彰の会事務局

☎/F0742-61-7194

・講演をお引き受けして　・・・・・・2ページ
・全国交流集会記念講演レジュメ　・・・・3ページ
・沓掛朗美氏の寄稿・・・・・9ページ
・丸浜昭氏について・・・　9ページ
治安維持法・京都学連事件100周年」集会へのご参加を　・・・11ページ

黒田貴子先生の講演

目頭を熱くしながら拝聴

黒田先生のお話は特にすばらしかったです

「楽しい全国集会と懇親会でした。あんなに多くの人が集まるとは、長谷川テルの顕彰の会のみなさま、そして、エスペランチストの皆さんの平和に対する熱い気持ちが伝わり、とても良い時間を過ごせたと思います。」

「黒田貴子先生による記念講演、目頭を熱くしながら拝聴し、これこそ継承の姿だと確信いたしました。」、「黒田先生のお話は特にすばらしかったです。」

4月13日に行われた第2回「長谷川テル訪問記念の碑」碑前祭の参加者から寄せられている感想です。

当号では、第2回碑前祭の記念に開いた「長谷川テル顕彰事業全国交流集会」で、黒田貴子先生が行った記念講演の「レジュメ」全文を含めた内容と、寄せられている感想を中心にお伝えいたします。

講演する黒田貴子先生

業績は凄いと思いました。「昨日はとても素晴らしい会に参加できたこと、改めて感謝いたします。

皆さまの真剣な表情に緊張しながらも、うなずきや笑い声に励まされて

――講演をお引き受けして――

『歴史地理教育』編集長　黒田貴子

黒田貴子先生の講演を聴く全国交流集会での参加者

「ヴェルダ・マーヨ通信」や碑前祭のご挨拶での、皆さまの素晴らしい発言に、いつも感銘を受けています。田辺さんから碑前祭の交流会で講演を、との依頼を受けた時は、こんな私がそんな大切な場でお話しするなんてとんでもない、という気持ちが先に立ちました。ところが、田辺さんは、事務局会議で、中学生の心に響いた授業を実際に聴いてみたいというお声が上がり、このような依頼となったのですと仰います。授業のことならば、私にもできることだと思い、いつも奈良の皆さまにお任せばかりの私がお役に立てるならば、と無謀にもお引き受けした次第です。

そして当日、中学生との「長谷川テルについて」の授業を再現させていただきました。皆さまの真剣な表情に緊張しながらも、うなずきや笑い声に励まされて、お伝えしたいことをお話しすることができました。千葉の市民学習会の方々の感想は「ちょっと褒めすぎ」なので、恥ずかしかったのですが、そのまま読ませて頂きました。あっという間の３０分でしたが、ありったけの思いを込めて話しましたので、話し終えた時には倒れそうなほどでした。その後、沓掛さまをはじめとする温かい感想を伺って、長谷川テルに心を寄せる皆さまの前で、このようなお話しをさせて頂いたことを本当にありがたいと思いました。

真実を伝え教える素晴らしいお話でした

奈良・長谷川テル顕彰の会　事務局員　田中澄江

念願の黒田先生のお話を聞くことができ、やはり私もこんな熱い気持ちで話していただける先生に出会いたかったなあと改めて思いました。真実を伝え教えるということが、子どもたちの心に素直に染み込んでいく素晴らしいお話でした。

全国交流集会記念講演レジュメ

２０２５年４月１３日

中学生の心をとらえた長谷川テルの生き方

長谷川テル碑前祭全国交流会　　黒田貴子

黒田貴子先生の授業風景

１．平和教育の４つの柱

被害・加害・加担・抵抗

＊重層的な場合も

抵抗：もうひとつの生き方

↓　生徒の目が輝く

２．日本における反戦・抵抗

（１）反戦・抵抗に生きた人びと

幸徳秋水（１８７１～１９１１大逆事件で死刑）

堺利彦（１８７１～１９３３）

内村鑑三（１８６１～１９３０）

与謝野晶子（１８７８～１９４２）

※非戦論　片山潜（１８５９～１９３３）

石橋湛山（１８８８～１９７３）

佐藤三千夫（１９００～２２）

小林多喜二（１９０３～３３、虐殺）

山本宣治（１８８９～１９２９刺殺）

齋藤隆夫（１８７０～１９４９）

鶴彬（１９０９～３８、反戦川柳、獄死）

桐生悠々（１８７３～１９４１『関東大演習を嗤う』）

渡部良三（１９２２～、２０２０歌集『小さな抵抗』、中国人虐殺を拒否）

坂口喜一郎（１９０２～３３反戦水兵、獄死）

槇村浩（１９１２～３８『間島パルチザンの歌』獄死）

長谷川テル（１９１３～４７）

宮本百合子（１８９９～１９５１）

三木清（１８９７～１９４５ ９.２６、獄死）

ジャック白井（１９１１～３７、スペイン人民戦線を支援する国際義勇軍　戦死）

日本教育労働者組合（教労：１９３０～１９３３）

自由法曹団（１９２１～）

共産党員、演劇人、映画作家、文学者

（2）日本における反戦・抵抗

日露戦争の非戦論から、大逆事件で初期社会主義者が弾圧された後も、反戦・抵抗の思想は、さまざまな社会運動（大正デモクラシー、小作争議、労働運動、女性運動 etc.）の中に息づいていました。

この運動を壊滅的な状態にしたのが、１９２５年に制定された治安維持法です。上記に挙げた「反戦抵抗に生きた人びと」の多くが１９３０年代に命を断たれていることがわかります。逮捕者は数十万人、虐殺された人９５人を含めた獄死者５００人余。植民地である朝鮮、台湾では、さらに苛烈で処刑された人も多数にのぼります。

こうした中、日本における反戦・抵抗運動は、ヨーロッパのレジスタンスのような大きなものにはなりませんでした。それでも、弾圧を受けながらも信念を持って反戦・抵抗の運動をした人たちのことを、伝えたいと思います。そして、いま、その人たちの顕彰の運動が起きていることは、とても意義深いことだと思います。

治安維持法をもとに、多くの人びとを拷問し、処罰し、死に至らしめた特高、憲兵の多くが戦後その罪を問われず、公安として同様の仕事を続けたこと、５０名以上が国会議員になっている日本の戦後の姿も知られるべきだと思います。

３．長谷川テルについて

（1）長谷川テルとの出会い

長谷川テルは、１９２９年に奈良女子高等師範学校（現・奈良女子大学）に入学しました。私が奈良女子大に入学して間もなく、木造の薄暗い図書館で1冊の本を見つけました。『テルの生涯』です。手擦れのした薄い本を開き、一気に読みました。奈良女高師は、良妻賢母教育を担っていて、その後身である奈良女子大も、同窓会をはじめ、その遺風が随所に残っていたため、入学してから私は息苦しさを感じていました。その奈良女高師に、長谷川テルのような清冽な生き方をした人がいたのだということに衝撃を受けました。

（2）反戦抵抗に生きた人びとの授業～長谷川テルを中心に～

T：戦争のことを考える時、４つの視点があります。それは、まず「被害」です。日本にとっての「被害」、何がありますか？

S：「空襲！」「原爆！」

T：無差別爆撃であった空襲も、広島・長崎への原爆投下も、決して許されることではないですよね。でも、それより前に、無差別爆撃を日本がしていましたね？

S：「重慶爆撃！」

T：そのことを知らないで、日本への爆撃だけを言っても世界には通用しません。重慶爆撃のように、日本が他の国に被害を与えたことを「加害」と言います。広島・長崎のことも、加害のことを知った上で伝えなければ、理解してもらえません。

加害として、他にどんなことがあったかな？

S：「南京事件！」「シンガポールの華人虐殺！」
T：戦争を考える上での３つ目の視点は「加担」です。積極的でなくても、戦争に協力したり、南京陥落を祝ってちょうちん行列をしたような行為です。そうして、４つ目の視点が「抵抗」です。抵抗したことで殺された人がいましたね？
S：「小林多喜二！」「山本宣治！」
T：世の中が戦争へとなだれていった時、抵抗をした人が少数でもいたのですね。今日は、長谷川テルという人について紹介します。
　長谷川テルは、奈良の女高師、今の奈良女子大学に入学しました。教員を目指していました。奈良で、彼女はエスペラント語に出会います。エスペラント語とは、世界共通語。この言葉を学ぼうという人たちは、世界の人たちとつながりたいのですから戦争には反対です。テルは治安維持法違反のために捕らえられ、学校を追われます。
　そして、エスペラント仲間である中国人留学生の劉仁と結婚して、中国に渡ります。日本との戦争中の中国に渡ることは、とても危険でした。中国に着いたテルはスパイではないかと疑われ、香港に追放されたりもしました。南京虐殺事件などを知ったテルは、日本のエスペランティストに向けて、こんな言葉を送っています。
　「お望みならば、私を売国奴と呼んで下さってもけっこうです。他国を侵略するばかりか、罪の無い難民の上にこの世の地獄を平然とつくり出している人たちと同じ国民に属していることの方を私は、より大きい恥としています。日中両国民の間には、いかなる基本的な敵対感情もありません。」
　次第に中国の人たちの信頼を得たテルは、日本軍に向けての放送をおこないます。「あなた方の敵はここにはいません。誤って血を流してはいけません。」　この放送を聞いて、心を揺さぶられた兵士がいたことも分かっています。
　こんな放送をして、テルは大丈夫だったのかな？そして、日本にいたテルの家族は？
S：「危ない目にあったと思う」「非国民とか言われたのでは？」
T：テルの家族は、非国民と言われ、父は自決も覚悟したと言います。テルは、家族のことを思っていました。母親に向けて「なくした二つのリンゴ」という文を書いています。ごめんなさい、お母さん。私は、お母さんにもらったまっ赤な２つのリンゴをなくしてしまいました。２つの赤いリンゴとは、健康な頬の赤さのことです。そして、テルは、たくさんの人たちが奪われてしまった赤いリンゴを取り戻すために、自分はリンゴをなくしてしまったのです、と書いています。
T：中国共産党の周恩来は、テルにこう言っています。「日本帝国主義者は、あなたを売国奴のアナウンサーと言っているが、実際は、あなたは日本人民の忠実な娘であり、真の愛国者である」
　テルは、戦争が終わって二年後、病気で亡くなります。３４歳でした。３か月後に亡くなった夫の劉仁とともに、佳木斯（ジャムス）の墓地に埋葬されました。二人の遺児は中国で大切に育てられました。テルのことを知った人たちが日本からこの墓を訪ねまし

た。治安維持法国賠同盟奈良県本部は、テルの顕彰運動を始めました。２０２３年春、テルが友人である長戸恭と訪ね「この世の中を変えるために一緒にやろう」と誓い合った奈良の般若寺にテルの顕彰碑が建てられました。除幕式には、１５０名もの人が集まりました。テルの遺児である長谷川暁子さんをはじめ、中国からの参加者、エスペランティストの方々の参加も目立ちました。

授業の最後に、「ヴェルダ・マーヨ」の歌詞を配ってケイ・シュガーさんの歌声を聴いてもらいました。歌詞を見ながら歌に聴き入る生徒の表情から、この日の授業が生徒の心に届いたことを感じました。

（３）生徒たちの感想

▸２０２２年度２年生

◆歌詞が５番までと長く、音楽も少し気になる感じに響くのですが、何も聞かないで歌詞をじっくり鑑賞すると、また深く意味が脳に沁みてきます。私は特に１番が好きです。私の中で最も響く何かがあります。うまく言えませんが、ひと言ひと言が刺さり、そこからその様子がイメージ出来て、自分の中に入ってくるのです。改めてこのヴェルダ・マーヨについて調べたいと思います。（こはるさん）

＊こはるさんは、長谷川テルのこと、エスペラント語について、詳しく調べたレポートを提出してくれました。

◆どんなにひどいことを言われても呼びかけ続けるという心がすごいなと思います。もしかしたら殺されてしまったり、自分の命があぶないのにも関わらず、中国の放送という、世間の目がある中でやっていて、こういう人もいたのか、と驚きました。（みさきさん）

▸２０２３年度２年生

◆長谷川テルさんの兵士に向かって反戦を訴えるという行為はとても勇気がいることだと思うので、それを出来る行動が凄いと感じました。また、自分の意見を恐れず言える長谷川さんの生き方はかっこいいと思ったし、様々な人を勇気づけられるような存在になったのではないかと思った。そして、長谷川さんが検挙され、退学させられてしまったのはとても残念だし疑問に思った。（みのりさん）

◆私の頭に残ったのは「長谷川テルの歌」です。１番の「決して血を流さず生き抜いてほしい」という文がすごい感動した。とある映画に主題歌の歌詞「裏切りが続こうが大切が壊れようと何とか生きて、生きてほしい」と似ていた。そこに込められた思いというのが心を震わせました。３番の歌詞にあるたくさんの言葉。この８つの言葉はそれぞれが素敵な言葉だなと思いました。テルという人の生き様を描いたこの歌から、本当にたくさんのことを感じ、たくさんのことを思いました（とある映画というのは、終戦後の日本人捕虜の方をテーマとしたものです）。（ゆいさん）

◆ほとんどの人々が戦争をおこなうことに特に疑問を持たず、賛成（戦争に加担）している中、悪いことは悪いと周りに流されず、自

分の信念を持ち、それをさらに行動に移した、抵抗した人々はすごくかっこいいなと思いました。長谷川テルさんの話を聞いて、女性であるけれど、戦争中の中国に渡ったりするなど、勇敢だと思った。また、長谷川テルの歌を聴いて、歌詞がテルさんの美しさを表していて、もっとこの歌を聴きたいと思いました。（かおるこさん）

◆日本のニュースでは、原爆などの被害を受けた日の〇〇年後というものが多い。もちろんそれを追悼するのは大切。でも私はそれと同じくらい、自分の先代のことだろうと、日本が加害をした国、日本が弾圧した人々も追悼しなければいけないと思った。また、長谷川テルさんのように、**母国が間違ったことをしていると気付き、それを発信していく行動にうつすこと、これが今の人々にも大切だと感じた。**（さくらさん）

◆昔の日本は本当に厳しいなと思い、それと同時に、長谷川テルさんや小林多喜二さんたちは、こういうことをすれば、政府に目の敵にされる、こういうことをすればつかまってしまうということをわかっていながら、自分の書きたいこと、伝えたいことを実際に書いたり伝えたりしていて強くて勇気のある人たちだなと感じました。ケイ・シュガーさんの長谷川テルの歌は私も好きです。こういうふうに昔のすごい人たちの功績をどんどん伝えていった方が良いと思いました。（きのさん）

◆私は特に長谷川テルさんの話が印象に残りました。警察に検挙されても諦めずに中国へ行ったりして、自分の危険を顧みず反戦運動をおこなう姿は本当にかっこいいなと思いました。中国に行くだけでも大変なのに、逮捕されるかも分からないのに堂々と日本兵に呼びかけるのはとてつもない勇気がいることだと思います。**私も何かおかしいと思うことがあったら、積極的に声をあげていきたいです。**（まおさん）

◆今日の授業の内容は、とても内容の重たいものだった。天皇が絶対的な権力を持ち、その下で警察も軍隊も横暴を極めた戦前には、小林多喜二のように、天皇制や軍国主義に反対したために逮捕・投獄された人はかなりの数にのぼったと知った。また、捕虜虐殺を学徒兵にもさせていたことも初めて知った。渡部良三氏のように、凄惨なリンチを受けても、信念に反する命令には従わないことができるだろうか。私には信念を貫く自信がない。同調圧力に屈せず、自分の命を危険に晒してでも、反戦を訴えた人々は本当に素晴らしい人だと思う。「希望の鳩 ヴェルダ・マーヨ」の歌詞から、長谷川テルさんがしてきたことが目に浮かぶようだった。この時代の日本は、本当に嫌な国だったのだろう。「同じ国民に属していることの方が私はより大きな恥としています。」という長谷川テルさんの言葉が胸に突き刺さった。この授業を聞いて、間違っていることに対して目を瞑らず、しっかりと向き合い、正すことの出来る人間になっていきたいと強く思ったが、それは本当に難しいことだと感じる。この時代に生きていたら、何も行動することは出来なかったと思うからだ。だから、**声を上げられる人間になるためにはどうした**

ら良いのか沢山学んでいこうと思う。現在、顕彰運動が進められているので、そこから学びたいと思った。（ことこさん）

「市民学習会　２０２４年９月例会」感想

◆つい諦めの気持ちになってしまったり、ネガティブな気持ちにもなりますが、長谷川テルさんのように行動を起こされた方々の話に元気づけられます。
そして中学生への授業の様子や生徒さんの反応を聞いて安心したり、黒田先生が若い先生方にバトンタッチして繋いでくださってるお話も心強く思いました。（Ｆさん）

◆冒頭、戦争が繰り返されてきた時代の**日本にも反戦・抵抗に生きた人々がこんなにも多くいたのかと驚きました。**その多くが、今の私の年齢よりずっと若い時に、時の政府に弾圧され殺されていることに愕然とします。彼らは文字通り、命をかけて戦争を止めようとしてくれたのですね。彼らが生きていてくれたならば、歴史は変わっていたかもしれないと思いました。いつの時代にも、権力をもつものは、なぜそこまでして戦争を遂行しようするのか、そのことに疑問を持ち、怒りを覚えます。いまも変わらず、政権与党は戦争に向かうために、ありとあらゆる手を使って、反戦勢力を封じ込めようとしていますが、彼らが確かに生きた証を胸に刻み、ささやかにでも「加担」ではなく「抵抗」する生き方を選べるような強さを自分も持ちたいと思いました。（Ｍさん）

◆楽しみにしていた黒田さんの授業を一生徒として聴くことができ、学び直しの時間を持つことができました。生徒さんたちの感想に感銘を受け、みなさんの感想も共有できることは、とても深い学びになります。また私たちの学習会にいらしてくださいね。（Ｙさん）

◆黒田さんの授業実践の一端を拝見し、歴教協の力を感じています。学校での１時間の授業が、子どもたちの育ちにどれだけ影響するか、底知れない力をまざまざと見せつけられました。敵とは国家が作り上げた概念なのだ、と長谷川テルは充分に分かっていたのですね。

いつの時代にもどんな世界にも、権力の弾圧に抵抗した人はいること、そして社会を変えていくのは私たち一人一人の行動であること、何より希望が湧いてくること。

黒田さんの魅力いっぱいの授業は、史実を知らされず、歴史の授業に全く興味を持てなかったかつての中学生たちに大きな刺激となりました。定期的な開催が叶いますように、と願うばかりです。終了後から♪ヴェルダ・マーヨ♪が頭の中でずっとリフレインしてい

ブックレット『長谷川テル』をゼミ仲間に広げたい

５月１２日に大学のゼミ（中国関係ゼミ）の集まり（１１名）がありますので、仲間に配布することにしております。彼らにはかつて映画「望郷の星」を観てもらったり、ジャムスのお墓の詣でたりした仲間です。映画の冒頭に出てくる人物「杉山文彦」も仲間の一人です。（湯川誼　静岡県御殿場市）

ます。ネットで楽譜を探り当てました。いつか合唱団で歌えるように提案しようと思います。ありがとう。（Ｓさん）

黒田先生の講演を聴いて、「黒田先生、是非長野県に来て下さい」と発言された沓掛朗美氏に、その想いを寄せて頂きました。

中学生たちの心に残る黒田先生の語りに何より惹かれ

沓掛朗美

黒田先生に長野で講演会をしてほしいと思った理由は、お恥ずかしいのですが、平和教育の「４つの柱」という観点を私が知らなかったからです。広島や長崎、沖縄・東京で原爆や空襲、集団自決などの「被害」は現地に足を運び知っていました。加害についても少しは知っていましたが、「加担・抵抗」の２点については意識したことがほとんどありませんでした。もっと学びたいと思いました。

沓掛朗美氏

そして、中学生たちの心に残る黒田先生の語りに何より惹かれ、またお聞きしたいと思ったからです。現役の先生たちにぜひ聞いて欲しい！と強く思いました。また黒田先生にお会いできるよう、計画を練って学び続けて行きたいです。

私自身は英語科の教員を２６年間やってきましたが、心の余裕がなくなり辞職しました。長谷川テルさんの非戦平和への強靭な意思には遠く及びません。悲しくなるほど弱くて無知ですが、「武器よさらば」の運動のご縁でテルさんを知りました。私はもっと中国の人たちと友達になりたいです。草の根の友好関係をより強固にし、権力者が立ち入らないほどに強く繋がりたいと思います。

その第一歩は、中国の皆さんに日中戦争の加害を心から謝ることです。そして、友達になってもらいたいと、お願いしたいです。発言の機会をいただき、ありがとうございました。

「全国交流集会」で、新刊『治安維持法１００年』（大月書店）の執筆・編集に携わり、碑前祭にも参加し、黒田貴子先生の記念講演を聴くことを楽しみしていながら、３月２５日に急逝された丸浜昭氏のことなどについて発言していただいた「ヒマラヤ杉の会」の三好裕策氏の発言を紹介します。

「治安維持法１００年」（大月書店）の「第２章７」と「コラム３」丸浜昭氏の担当部分について

ヒマラヤ杉の会　三好裕策

三好裕策と申します。２０２５年３月３０日発行「治安維持法１００年」（大月書店）の「第２章７」と「コラム３」を執筆担当した丸浜昭君（元歴教協事務局長・同副委員長）の高校時代からの友人です。

「コラム３」については昨日４月１２日の朝、元ＮＨＫディレクターの永田浩三さんがフェイスブックで、『特高月報』を松浦総三氏がアメリカで調査された内容を紹介されていますが、同じ杉並で懇意だった「丸浜さんとはもっと話をしたかった。」と結ばれています。丸浜昭君が急逝したのが３月２５日早朝でした。その１週間前の３月１８日には歴教協のズームを借りて趙景達（チョウ・キョンダル）氏の「朝鮮民衆の社会史」（岩波新書）の勉強会を丸浜君がチューターで高校時代の友人たちとやっていました。

もうすでに体調は悪そうでした。

三好裕策氏

その２か月余り前に今回の本「治安維持法１００年」の自分自身の執筆担当部分と、つづく、「第２章８「エスペランチスト・長谷川テル」の西田千津さん・田辺実さん執筆担当部分の「編集事務を担当した」と丸浜君は言っていました。

第２章８の西田さんと田辺さんの執筆担当部分については、「編集上の大幅な縮小など、無理な注文にも快く応じて下さり、本当に気持ちの良い方々だと感じた」と言っていました。

丸浜昭君の担当した第２章７は「治安維持法下、朝鮮の学生運動」ですが、特に（２）光州学生独立運動については思い入れがあったと思います。

なぜかと言えば、２０１８年に私を含めて明治大学・大学院での教え子でもあるＪＩＮ・ＰＡＲＫ君のコーディネートで、ＪＩＮ君の故郷でもある光州を実際に訪ねていたからです。１９８０年５月１８日の民主化運動の現場、弾痕生々しいビルの現存、あの映画『タクシー運転手』に乗せてもらって全世界に５・１８事件の映像を届けたドイツ人ジャーナリスト・ユルゲン・ヒンツペーター氏の慰霊碑もある国立犠牲者墓地、そしてＬＩＮ君の母校見学、その後の済州島４・３事件現場など充実した歴史探訪の旅でした。

第２章７の１９２９年・光州学生独立運動については、「日本語で光州独立学生運動記念館のホームページがあったので、大変、助かった」と丸浜君は言っていました。

また、日本・中国・朝鮮のなかでも朝鮮の民衆運動は「日本の植民地統治がなければ一番進んでいたのではないか」とも言っていました。

どれだけこの場で黒田さんの講演を聞きたかったことでしょうか。丸浜昭君も、本日の黒田貴子さんの長谷川テルについての講演を楽しみにしていました。そして黒田さんから勧められたと言って、その後、宇治のウトロ平和祈念館訪問も予定していました。どれだけこの場で黒田さんの講演を聞きたかったことでしょうか。そう思わずにはいられません。ぜひ、６０年来の友人である丸浜昭君の絶筆を含んだ「治安維持法１００年」のこの本をお手元に置いていただけるようお願い申し上げます。

「治安維持法・京都学連事件１００周年集会」へのご参加を

「治安維持法・京都学連事件１００周年事業実行委員会」代表　井口和起

ご紹介いただいた井口和起です。今日は、「治安維持法・京都学連事件１００周年事業実行委員会」を代表して私達の活動を紹介し、ご参加のお願いをする機会を与えてくださったことに感謝します。

井口和起氏

この実行委員会は、２０１９年に出発した「戦前大阪外語社研研究会」（代表：成瀬龍夫）の呼びかけに応えた、「京都の民主運動史を語る会」（現世話人代表：井口）とが共同で、治安維持法制定一〇〇周年と日本で最初の適用事件となった「京都学連事件」を中心に、今年１２月にシンポジウムを京都で開催しようと呼びかけ、計画した活動です。１月に実行委員会を結成し、第２回目の実行委員会を３月に開催しました。大阪・京都・奈良・滋賀の四府県から国賠同盟をはじめ関係諸団体が参加してくださっています。「奈良・長谷川テル顕彰の会」も加わってくださっています。

シンポジウムは、１２月１３日㈯午後、ＪＲ二条駅至近の立命館大学朱雀キャンパス(予定)で、「逆流に抗して、自由を求めた青年たち」というテーマで参加地域・団体からの報告を中心に進める計画です。奈良からは「国境を越えたエスペランチスト 長谷川テル」という報告をいただくことで、了解も得ています。

準備期間中には適宜各地域で学習会も計画しますので、それへのご参加も含めて、年末のお忙しい時期になりますが、１２月の集会にぜひともご参加くださいますようお願いする次第です。

編集後記

第２回「長谷川テル訪問記念の碑」碑前祭を記念して行われた「長谷川テル顕彰事業全国交流集会」での黒田貴子先生の記念講演の特集を中心に編集しました。学校現場における平和教育で、戦争の被害と加害だけでなく、「抵抗した人々がいることを伝えると生徒たちは目を輝かす」と言われます。その典型ともいうべき黒田先生の実践例に学び広げたい思いを改めて強くする機会となりました。

「抵抗した人々がいた」ことを、国民の中で語り広め、平和と国民主権のために闘った人々への国家による謝罪と賠償を求める闘いは、「再び戦争を行わない」証として、今日極めて重要であることを改めて確認することが重要です。平和と国民主権を主張する人々をことごとく弾圧し、国民を戦争に駆り立てた治安維持法１００年の今年、治安維持法で検挙され奈良女子高等師範学校を卒業直前に追われた長谷川テルの顕彰事業の意義は特別なものがあります。

そうした意味で、井口和起氏が呼びかけられた、１２月１３日に開かれる「治安維持法・京都学連事件１００周年集会」への参加を長谷川テル顕彰事業の一環として積極的に取り組みたいものですね。

奈良・長谷川テル顕彰の会　事務局長　田辺実